

大阪市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」(田万家旧蔵本)の研究

知 念 理

はじめに

政治・社会史、建築・庭園史、民俗・芸能史など、美術史を超えたさまざまな専門分野で洛中洛外図に関わる研究が進められている。近年はとくに、黒田日出男氏を代表者とする両度の科研(平成十四(二十一年度)が牽引役となり、江戸時代の洛中洛外図屏風研究に大きな進展が見受けられる⁽¹⁾。

この科研は、洛中洛外図を中心とした中・近世風俗画の絵画史料学的研究の確立と、その基盤整備に向けた作品・史料の高精細デジタル画像化の推進を主要目的に掲げた。とくに林原本をめぐって顕著な研究成果を生み、一連の作品群、およびその制作工房を第二定型洛中洛外図におけるもつとも注目すべき存在へ押し上げた。また、研究対象作品の所蔵館との共同研究を生かした巡回展を企画し、研究成果の一般への公開、洛中洛外図の魅力発信にも意欲的に取り組んだ⁽²⁾。

大阪市立美術館では、平成二十年度末に上記科研からの依頼によ

り、旧蔵者にちなんで田万家旧蔵本と通称されてきた洛中洛外図屏風【図1】(以下、大阪市美本という)にかかる八×一〇ポジの新規撮影、並びに高精細画像データ(二〇〇〇dpi)のコンテンツ蓄積に協力した。当時の窓口は石川知彦氏(現龍谷ミュージアム副館長)であった。作業の成果物として、翌年には、大阪市美本一両画面の高精細画像閲覧専用 Pictionary (ver.1.0) インストールディスクが作製され、本科研を構成する研究者、関係研究機関への配布がなされた。また同時に出た研究成果報告書には、大阪市美本のランドマーク比定が図版掲載され、第二定型作例の系統分類と大阪市美本を含む作品群の位置づけに関する考察が載せられた。

その後さらに大阪市美本、あるいは大阪市美本に關係する作品群について論じた個別研究には接していない。第二定型の中では比較的早くから知られてきた大阪市美本ではあるが、黒田氏が「江戸時代の洛中洛外図屏風の主要作品についての個別研究の蓄積」、「個別の綿密な分析、読解作業……個々の作品の美術史的かつ絵画史料論的な把握⁽³⁾」を訴えるように、描かれた事象の分析・読解の絶対量が不足しているのが現状である。林原本系以外の第二定型作例は総じ

て同様な状況にあり、初期洛中洛外図屏風の研究がそうであったように、専門領域各方面からの研究蓄積が急務と考えられる。

大阪市美本左隻・六扇目の下方には西本願寺がみえる。孟蘭盆の燈籠会の準備が行われている境内の左手（東南）には、滴翠園と飛雲閣が描かれている。林家本など数作例にも含まれてはいるが、ごく簡略化された図様でしか描かれておらず、確実な史料を欠く滴翠園、飛雲閣の築造時期を推し測る貴重な絵画史料として諸分野から言及がなされてきた。⁽⁴⁾ 大阪市美本では境内の燈籠会とともに際立つて詳細に描かれていることから、屏風の発注者、制作事情にも関わる内容ではないかとも考えながら筆者も注目してきた。

ところが近時、飛雲閣の創建に関する新説が加藤繁生氏により発表され、その際、大阪市美本における西本願寺、および飛雲閣の描写、またその制作年代についても言及があり、作品画面の基本的な解釈に関わって見過ごせない異見が多々示されたのであった。⁽⁵⁾

新たな史料解釈から導かれた加藤氏の新説はそれ自体非常に興味深く、本筋である近世史、建築史の方面からの検証をまちたいが、大阪市美本を含めた数点の洛中洛外図の描写、表現に対する見解に限っては疑義が募るのを禁じ得なかった。記録から知られるいくつかの「事実」と、洛中洛外図という絵画表現に置き換わる際に選択される、ある「それらしさ」との間に隔たりをどう読むか。また景観年代と制作年代との関係認識などに混乱が見受けられると感じた。西本願寺の描写は第二定型作例の景観年代を計る際の重要な指標のひとつもなっているだけに、より慎重な解釈が求められる。

こうした最近の科研との接点、飛雲閣創建をめぐる新説提起を主たる機縁として、大阪市美本の再考を期したいと考えるにいたった

が、右記西本願寺、及び飛雲閣の描写をどう位置付けるかについては、紙数の関係から稿を改める。本稿ではまず、近世の洛中洛外図研究を担ってきた美術史をはじめ、近世史、建築史、芸能史などの諸分野から、大阪市美本に対してどのような考察、言説が及ぼされてきたかをできるだけ網羅的に紹介、検証し、その基本的な位置づけを再確認する。また、重要な問題点を含む事象、ランドマークについては、筆者自身の読解による私見の提示を試み、大阪市美本の新たな位置づけを求めてゆきたい。もって、江戸時代洛中洛外図屏風研究に若干なりとも資すれば幸いとするところである。

I 大阪市美本はどのように見られてきたか

一 近世風俗図屏風としての大阪市美本

大阪市美本の旧蔵者は政治家、弁護士として活躍した田万清臣氏（一八九二―一九七九）である。明子夫人とともに収集した仏教美術、近世絵画など六六三点のコレクションが、昭和五十五―六十二年にかけて（大阪市美本は昭和五十五年）大阪市立美術館に寄贈された。田万氏が大阪市美本を入手した時期は定かではないが、その初公開は昭和四十四年開催の「田万コレクション東洋美術展」（大阪市立美術館、十月二十五日―十一月十六日）までさかのぼる。⁽⁶⁾

そして翌年には「京の美術 京名所風俗図」展（京都国立博物館、七月十一日―八月十六日）にも出陳され、広く存在を知られることとなった。同展の企画担当者である武田恒夫氏による次のような作品解説が大阪市美本への具体的な言及としてはもっとも早いものであろう。西本願寺・飛雲閣の描写もいち早く指摘している。

「右隻は鴨川を対角線的に配することによって、動的な構図がはかれている。この種の系列も他に二、三みいだされ、漢画系統の作例である……二条城では、天守閣の位置が寛永期以前の姿……城前は行幸ではなく、参内の行列……左端の淀付近にも、なお城は描かれず、水車だけの景趣……三門や経蔵が現れない知恩院の寺観……景観年代は元和期と推定……西本願寺境内に飛雲閣が認められるのは珍しい……筆致にもなお崩れがなく、この時期の優品として評価されよう」⁽⁷⁾

武田氏が「この種の系列も他に二、三みいだされ」というのは、これ以前に同氏が企画担当した「洛中洛外図」展（京都国立博物館、昭和四十年）に出品の林家本などを指すと推測できるが、林家本と大阪市美本との類縁関係を初めて明確に指摘したのは辻惟雄氏であった。

「（林家本は）勝興寺本に見られる第二の定型が、池田本（林原本＝筆者注、以下省略）よりはいくぶん保守的なニュアンスをもつて、継承発展されたもの……勝興寺本と異なる点は、東西の筋の勝手が逆になっている……方広寺大仏殿がひとまわり大きく描かれる……高瀬川が三条橋から五条橋の手前まで描かれている……五条橋の河原と四条河原に、高津本（現九州国立博物館蔵＝筆者注）のそれと似た粗末な小屋掛けが見える……伏見城が除かれて……桂川が南に下って淀川となり大山崎あたりに至るまでが描かれ……二条城とその門前の光景（参内）は、勝興寺本ほどには大きく扱われず……勝興寺本に直結するような品のよい静謐な画調が林本の特徴である」⁽⁹⁾

「土佐派的要素と狩野派的要素の折衷ともいべき人物や岩な

どの描写の特徴から見て、これも民間工房＝絵屋の一派の筆を想定……景観年代は、元和五年の知恩院三門建立以前……制作年代は……元和年間を想定……いわゆる仕込絵として……ほとんど同一図柄の……色調・人物描写の特徴など瓜二つといえるほど林本に似通った田万本（大阪市美本＝筆者注、以下省略）は、明らかに同じ時期の同一工房による制作を意味しよう」⁽¹⁰⁾

辻氏による右の指摘の後、大阪市美本と林家本の関係については狩野博幸氏も同様の見解を示し、両本細部の相違点、制作年代の後、また景観年代などについて次のように述べた。

「右隻に祇園会、左隻に二条城より内裏に向かう参内光景を配する……この屏風構成は山岡家A本（京博A本＝筆者注、以下省略）……林家本……河合家本……パーク氏B本などの系列に属する。ことに林家本とは景観構成や筆致が酷似し、同一工房の手になる作品と判ぜられる」⁽¹¹⁾

「田万家本では二条城の南蛮人が武士に変えられ、五条橋川下のかぶき小屋が省かれ、方広寺鐘樓が加えられていることから本図（林家本＝筆者注）の方が田万家本に先行して制作されたと判ぜられる」⁽¹²⁾

「四条河原の小屋では能や軽業……五条橋詰にも三味線を弾く女的一座……いずれも寛永期の小屋に比べると貧相な造りで……左隻左上辺には淀が視界に入っている……水車もみえるが、寛永二年（一六二五）竣工の淀城を見ることはできない……町屋の形態は二階造りが一般的……瓦葺の屋根や白亜の土蔵も目につく……喧嘩などの殺伐な光景が皆無……豊臣方との決着のついた安定した京都の世相を忠実に反映……東山の桜、嵐山の紅葉が一応

描かれているが季節感希薄……京の数多い名所をできるだけ整理した形で描きあげる⁽¹³⁾」

「高瀬川の存在、慶長十九年（一六一四）造営以後の形を示す内裏、元和三年（一六一七）焼失以前の結構の西本願寺などから、本図の景観年代は元和初期と推定される……制作年代は……やや下であろう。町絵師の筆としては雑然としたところがなく、静謐な趣きがある⁽¹⁴⁾」

以上、武田、辻、狩野の三氏による大阪市美本への従来の指摘を抜粋引用した。淀、大山崎に至る洛外西南域への視野拡大、政治体制表出の希薄化、クセのない穏やかな画趣、元和年間の景観・制作年代、林家本と同一の町絵師工房作など、大阪市美本の公開から十年足らずの間にその見方の方向性が固められ、美術史的な位置づけとして定着をみた。

その後も狩野氏は、「都の形象 洛中洛外の世界」展（京都国立博物館、平成六年十月四日～十一月十三日）の企画担当、同展による大型図録の刊行を機に、大阪市美本の筆者帰属や画面描写に関する言及を加えている⁽¹⁵⁾。

「二条城ははるかに小さくなり、伏見城も見えず、洛外名所の画面に占める割合が増している……左隻6扇目上方には……淀までもが視野に入ってくる。京博本、勝興寺本とは別の系列と見なすべきであろう⁽¹⁶⁾」

「狩野派の流れをくむ絵師の筆致は的確で無駄がなく、描かれた人の数も出光本などに比べても多いにもかかわらず、少しも煩わしくない⁽¹⁷⁾」

「二条城は……寛永修築以前のもの……参内行列が描かれてい

る……牛車1台のみがあつて、輿は1基も見えない⁽¹⁸⁾」

「西本願寺が大きく捉えられている……元和3年焼失以前の光景か……聚楽第の遺構として有名な飛雲閣が池とともに描写されている⁽¹⁹⁾」

多様な展開をみた第二定型諸本のなかで、林家本、大阪市美本、萬野A本の景観構成、構図が類似している点には武田、辻両氏も早くに注意を向けていた⁽²⁰⁾。この種の類型はシアトル美術館本、グルーバー氏旧蔵本（現東京富士美術館蔵、以下、東京富士美本という）にも及ぶことについては小沢弘氏の指摘があつた⁽²¹⁾。「都の形象」展では、「町筋の勝手や景観範囲など大阪市美本の系列に属する」萬野A本に加え、「大阪市美本・萬野A本の系列にあるが、淀のあたりの風景は大阪市美本に近い……元和期の狩野派周辺の画家の筆⁽²³⁾」とみなされる神戸市博本が新たに提示され、それらの系統的まとまりに改めて意識が向けられた。

また狩野氏が以前は「町絵師の筆⁽²⁴⁾」、あるいは「町絵師とはいいながら漢画的素養を感じさせる⁽²⁵⁾」と述べてきた大阪市美本の筆者について、「狩野派の流れをくむ絵師」とややニュアンスが具体化したのも神戸市博本の出現が考慮されたことによるのだろう。西本願寺・飛雲閣の描写についても良質な図版が提供され、以後よく周知されたと考えられる。

二 絵画史料としての大阪市美本

（一）参内行列

「都の形象」展の前後から、第二定型洛中洛外図屏風の研究はその本丸を近世史の領域に移し、さまざまな事象をとらえた絵画史料

的な分析がメインテーマとなった。第二定型諸本の主題的モチーフというべき左隻・二条城前の行列（行事）をめぐる考察もそのひとつである。

これについては早く前出の武田氏が、第二定型作品の展開を端的に特色づける要素として注目し、徳川將軍の参内、祇園会 of 神輿渡御、後水尾天皇の行幸、南蛮人・朝鮮通信使による朝貢をあげていた。⁽²⁶⁾ この四種に加えて近年までに、徳川和子入内の行列、武者関係の行列、祭礼の風流が描かれることが指摘されるようになり、京都の政治的権力バランス、また屏風の制作意図や発注者の性格などを探る指標としての解釈が進められてきた。⁽²⁷⁾

大阪市美本には二条城から内裏へと向かう徳川將軍の参内行列が描かれている。狩野氏も指摘のように、行列には牛車一台のみ見られ、輿は含まれない。大塚浩美氏はこのタイプの参内行列について次のように指摘している。

「林家本では行列の描写が小さくなり、二条城前の馬場から西堀川通を北上する部分に限定され、騎馬、牛車が中心となる。田万家旧蔵本、神戸市立博物館本の行列もほぼ同じで……山岡家本等と林家本等とは、行列の大小の違いはあるが、二条城前の馬場を北上する牛車等が共通することから、同一の行列を描く」⁽²⁸⁾

「山岡家本の第二扇の上部には北野社の東側に歌舞伎小屋を描いている……慶長八年を意識して描いたもの……行列は慶長八年三月二十五日の家康の参内行列の可能性が高い……他の諸本について、行列の編成から同じ参内行列と考える」⁽²⁹⁾

「河合家本、林家本、田万家旧蔵本、神戸市立博物館本も將軍の参内行列であるが、行列の場面は次第に小さくなり……徳川氏

の出来事を強調しない作品群といえる……將軍行列が主題的なモチーフの役割を終えた段階の一般的な洛中洛外図の構図を示している」⁽³⁰⁾

大阪市美本に描かれる諸風俗から、狩野氏は元和偃武によって安定回復した京都の世相を読み取った。大塚氏が指摘する参内行列の描写縮小も、やはりそのような時代の空気を物語る符牒として理解できる。ただし、大阪市美本の牛車【図2】は葵紋ではなく梅紋で飾られ、さらに、林家本では紋が消えて無地となってしまう点を加えて指摘しておく。將軍参内というモチーフの形骸化を如実に示す描写の変化として把握しておきたい。

（二）祇園会

左隻の二条城前の行列（行事）と対比される右隻のモチーフは祇園会 of 山鉦巡行である。祇園祭礼場面の考察は、美術史からは初期洛中洛外図、祇園祭礼図を中心に進められてきているが、⁽³¹⁾ 他の諸分野からは第二定型作品の描写にも検討が加えられるようになった。

林原本を中心に山鉦懸装品・店暖簾・幕など布帛類の描写を分析した小川慧里子氏は、若干ではあるが大阪市美本の特徴にも言及した。つまり、山鉦が一番多く十六基描かれること、見送り幕が上杉本、堺市博本、萬野A本などと同様に天水引幕からかけられること、山には山と連続した形で見送り幕がかけられること、を指摘した。⁽³²⁾

また「祇園囃子」の成立と展開を分析した田井竜一氏は、大阪市美本ほか元和期とされる洛中洛外図における山鉦の囃子を観察して、次のように述べた。

「この時期では「羯鼓稚児・太鼓持ち（短胴杵付き締め太鼓）と太鼓打ち・鉦・笛（楽器の位置はばらばら）」という編成がひ

とつのボタンとなっている……二人羯鼓稚児は江戸時代初期までは、継続してえがかれている……羯鼓稚児の立ち位置が前方に移動しているものが多くなる……この時期以降の羯鼓稚児には、腕を上にあげ、バチを八の字型や斜めにしたり、羯鼓をうつ動作用がよくみられる……(延命寺本……田万家旧蔵本……等)……小鼓・大鼓はすでに消滅しており、さらに鉦の撞木の出現はほぼこの時期までとなっており、囃子の様式に変化が生じてきている……この頃になると、鉦に音頭取りが登場してくる⁽³³⁾」

【図3】は音頭取りを乗せた大阪市美本の月鉦で、田井氏はその描写を次のように記述している。

「月鉦(羯鼓稚児(やや身体を斜めにし、腕を左右にひろげ、バチを斜めに)、笛(被り物)、太鼓持ち・太鼓打ち(太鼓持ちは太鼓をかなり上にあげる、後方)……月鉦の羯鼓稚児に、若干ひねった動き、躍動感……洛中洛外図では山鉦が一番多く描写、音頭取りあり⁽³⁴⁾」

このように、大阪市美本は諸本中もとても多くの山鉦を描いている。同系統では一基も描かない神戸市博本は何らかの事情、意図を反映しての例外としても、林家本ほかにみられる数基程度の描写からすれば格段のこだわりを感じさせる。前出の辻氏がかつて図示、比較した諸本の山鉦巡行、神輿渡御のルートなどと合わせ、関係諸情報⁽³⁵⁾のさらなる総合、分析が期待される。

(三) 芸能(芝居)興行

モチーフとしての扱いは祇園会よりも小さいものながら、いわゆる画証として、それ以上に注目されてきたのは、北野、五条橋詰(五条河原)、四条河原における歌舞伎などの芸能(芝居)興行である。

恒常的な興行地としては北野、五条河原が先行したが、六条三筋町の遊女歌舞伎の進出により、慶長後半にまず北野が衰え、元和初期には五条橋詰から四条河原へとその中心地が移った。このような興行地の変遷が、洛中洛外図諸本の芝居小屋の所在によっておよそ確かめられるという⁽³⁶⁾。内藤昌氏は林家本、舟木家旧蔵本(現東京国立博物館蔵)、大阪市美本の三作例には五条橋詰と四条河原の双方に芝居小屋があり、慶長後期から元和初期にかけての興行地の状況を反映するとした。

林家本では五条橋西詰、東詰に各一座、四条河原に二座あり、これは神戸市博本も同様の配置である。大阪市美本では五条橋東詰に一座、四条河原に三座となり、また萬野A本では四条河原に一座のみとなる。神戸市博本、林家本から大阪市美本へ、さらに萬野A本へと、基本的景観構成としては同系統とみられる作品間において、芸能興行地の漸次推移が反映される点が重要と考えられる⁽³⁷⁾。

大阪市美本の芝居小屋は筵張り、床下吹抜、土間席のみで、櫓は紋幕を張るだけである。こうした「粗末な小屋掛け」(辻氏)は「寛永期の小屋に比べると貧相な造り」(狩野氏)であり、細画ゆえの省略、写し崩れなどを十分考慮する必要があるが、四条河原図や名所遊楽図系作品にみる整った小屋の体裁とは一線を画している⁽³⁸⁾。

(四) 農耕

繁華な芝居興行地とは対照的なエリアともいえる村落の田畠、農耕に注目する視点もあった。奥田敦子氏は洛中洛外図屏風諸本の農耕風景を分析し、描かれた田畠の地理的位置が、文献史料、絵図から割り出される実際の京都の代表的な耕作地と符合すること、その場所の特徴を示すための実写的な性格をもっていたことなどを論じ

た。⁽³⁹⁾

勝興寺本以降の第二定型洛中洛外図屏風では、豊臣秀吉の御土居建設（天正十九年・一五九一）により、耕作地が京の都市域周辺へ移動したことを反映し、農耕描写の減少、農事の種類も田起しと刈田に一元化されるなどの傾向がみられるとし、風俗画としての大阪市美本の性格に関わっては次のように述べた。

「大阪市美本も、近世洛中洛外図屏風の特徴である農耕描写の減少、内容のタイプ化、四季表現の偏りといった傾向を持つ……この洛中洛外図屏風に顕著に見られる特徴に……左隻三扇中央部のように昼餉を楽しむ場面……左隻五扇上部の休息をとる農民の姿といった遊樂的要素が大きく描写される⁽⁴⁰⁾」

「昼餉の描写が大きく扱われるようになる背景として、行楽地化した近郊農村の描写にふさわしい遊樂的雰囲気の様子が好まれたためと推測される……和様の四季耕作図との影響関係が考えられる……大和絵系絵師の間では特に鑑戒画としてよりも遊樂図としての耕作図が前面に押し出され……農耕場面に遊樂的な昼餉描写が表れたと推考される⁽⁴¹⁾」

奥田氏の集計によれば、岡崎を中心とする東山一帯、二条城以西の洛西一帯に田畠、耕作場面を描く作例が多いことが判明する。大阪市美本では大仏殿の北、東寺の東にも耕作地が加わる。またステレオタイプ化しているとはいえ、田起し、脱穀など農事の種類が多彩であり、遊樂的な昼餉【図4】・休息の場面を複数描くなど、農地、農耕風俗の描写に対する積極的な姿勢が際立っている。⁽⁴²⁾ 景観構成、構図のうえでは同系列とみなされる林家本、神戸市博本、萬野A本などとの差異は明確で、この一群における大阪市美本の独自性の一

端を浮かびあがせたことは重要であった。

（五）内裏

洛中洛外図諸本に描かれた内裏の建物配置を3D・CG模式図によつて比較した高屋麻里子氏は、神戸市博本系統（後述の科研C群の一部）の内裏の描写に関して、その特徴を次のように述べた。

「南門も常御所も描かれている大阪市美術館本を例外としており……それぞれ対応すると考えられる内裏が一定しない……建物も多く省略され簡略な表現がされている……大阪市美術館本に描かれる内裏は南門があるため慶長内裏と考えられ建物配置なども林原本系統に近い……しかし神戸市博本、萬野A本は南門が描かれていないため天正内裏と考えられ、同一系統内とされながら異なる内裏が描かれている可能性が高い。描かれた内裏の内容も他の系統のように抜きん出て正確なものがみられない⁽⁴³⁾」

通常、内裏は南門の有無で慶長十八年（一六一三）に新造なった慶長内裏か、それまでの天正内裏かを見分けている。南門を描く大阪市美本だけが慶長内裏を描き、南門を描かない神戸市博本、萬野A本は天正内裏を描くと解して問題ない。慶長内裏を描き、「建物配置なども林原本系統に近い」という変化をみせている大阪市美本の内裏表現から、神戸市博本、萬野A本（さらに林家本）などとの粉本の性格の違い、その後発性が推察されるのである。⁽⁴⁴⁾

三 類型として的大阪市美本

（一）景観配置と筋勝手

冒頭で触れた近年の科研では、ランドマーク比定の作業を通じてのより総合的な描写景観の分析を重要な研究課題とみなし、第二定

型諸本の系統分類が本格的に試みられた。

その先駆ともいえる研究が、かなり早い段階でまず建築史の見地からなされている。先出の内藤昌氏が洛中洛外図の景観類型とその展開を論じたもので、次のような解析手法により各屏風の空間構成の特色を明らかにしようとした。⁽⁴⁵⁾

「京都盆地一帯を現状地図上にプロットし……東西を一二行、南北を五〇行に分割、堀川筋を中央に配して、御土居や賀茂川・高野川……の流路を模式化して……特定の洛中洛外図の景観描写が如何なる物件をあつかい、どのような構図で形成されているかを右隻・左隻の別をおこなってプロットすれば、模式的な景観類型が明確に表出でき、おのおのの特性が理解できよう」⁽⁴⁶⁾

ここで問題となるのは景観類型「B型—洛中洛外図系」の複数の下位分類で、第二定型作品に関わる二つの類型について、次のようにその特徴を述べた。

「右隻・左隻の境界線のはとんどの部分が南北に走る……ただし北端部の鞍馬寺・上賀茂社と、南端部の東寺・東本願寺の位置が未だ不安定」⁽⁴⁷⁾であるB2型

「B2型の構図上の不安定要素がなくなり、右・左隻の境界線が地理的に正確に南北を向いて走っている……洛中洛外の景観を東山・西山を背景に整然と二分するに至る」⁽⁴⁸⁾B3型

前者のB2型には勝興寺本、林家本、萬野A本(当時滝沢家蔵)、河合家本、林原本などが分類され、論文発表時、まだ田万氏の所蔵であった大阪市美本は後者のB3型に分類された。そして「元和初頭の景観年代を示す田万家蔵本」が「この類の先駆」で、サントリ―本など「寛永期の景観年代をもつ屏風の一般型」⁽⁴⁹⁾であるとされた

のである。

実際に描写された画面の構図から識別するならば、美術史からの指摘のように、大阪市美本は明らかにB2型の諸本と近い関係にあり、後水尾天皇の二条城行幸を描くB3型の諸本とはむしろ隔たりに印象付けられる。ところが、左右隻の境界をどう設定するかという画面設計の志向性に目を向けると、意外にもB3型との関係性が浮上する。つまり、大阪市美本には景観類型としての後発性が潜在していることを示唆した点で見過ごせない分析といえる。

類型設定を目指すもうひとつの試みが、描かれる町筋の勝手による分類であった。作例による勝手の違い、作画上の影響等については先の武田、辻氏以来美術史からの言及があったが、片岡肇氏は左右隻の順勝手・逆勝手の組合せから多数諸本(約一〇本)を分類して五類型を示した。大阪市美本はその「第2類—左右隻とも順勝手のもの」に分類された。

「第二の定型では……林家本、グルーバー氏本、萬野家A本、シアトル美術館本、田万家本、河合家本、真野家本、フリー美術館本などがある……右隻の下京の描写範囲が南へ拡大された以外は、ほとんど第1類(京博A本、勝興寺本など≡筆者注)の景観範囲と違いはない……この第2類は25例あまりある」⁽⁵⁰⁾

筋勝手による五分類だけでは諸本の系統的把握やそれらの相互関係を示すには至らない。必然、具体的な図様、表現の類似点を精査、比較することから、より小単位でまとまる作品群の抽出を目指すことになる。片岡氏が考察した「司馬家本型類型」がそのひとつだが、同氏は全体で十四もの類型を見込んでいたようである。⁽⁵¹⁾

(二) ランドマーク比定

景観配置、筋勝手に注目した洛中洛外図屏風の類型化は、次に諸本の悉皆的なランドマーク比定へと向かった。比定の作業を通じて得られたデータをもとに、大澤泉、加藤裕美子の両氏は第二定型作品をまず大きく三系統に分類した(第二定型科研⁵²)。大阪市美本、神戸市博本、萬野A本からなる一系統を「大阪市美本系統」と呼び、その特徴を次のように述べた。

「1つ1つのランドマークが小さく、遠景が詳細に描かれる……左隻6扇に淀付近の景観……石清水八幡宮や宝積寺が描かれている……勝興寺本系統と比較すると大阪市美本は二条城が小さく描かれている……2扇分程度の大きさで屏風の中心に描く……二条城の西から広隆寺付近に至るまで田畑が描かれている……石不動の描き方……東側に門が描かれその前には階段が描かれている⁵³」

「特に神戸市博本と萬野A本は近似している……二条城西域の……農村の中に鎮守と思われる社が描かれているが、大阪市美本には描かれていない……大阪市美本左隻4扇に描かれている「戸名瀬の滝」は萬野A本、神戸市博本には見られない。方広寺の鐘楼についても……萬野A本、神戸市博本には見られない……大阪市美本の金閣は正確に描かれているのに対し、萬野A本、神戸市博本は三重塔の様に描いている……大阪市美本が最もランドマークを詳細かつ正確に描いている⁵⁴」

「淀付近の景観は描かれていないものの、二条城西域の農村の景観が描かれ……順勝手で描かれている……四条、五条河原の芝居小屋の描き方は大阪市美本に非常に似ており……河合家本も大

阪市美本系統の諸本である⁵⁵」

続く科研(風俗画科研)では、対象作例を大幅に増やしたランドマーク比定の改訂がなされ、第二定型作品をA～Hの八群に系統分類する試案が報告された⁵⁶。大阪市立美本を含む一群はC群と呼ばれ、前回一群には含めていなかった林家本をはじめとする五作例を加えた計九作例(高津B本、河合家本、久保惣本、林家本、シアトル美本、東京富士美本、大阪市美本、萬野A本、神戸市博本)をあげ、この系統の特徴を次のように述べた⁵⁷。

「二条城は比較的小規模……二条城の西域に広大な田園風景……景観の中心が左隻壬生寺付近に描かれる御土居……遠景が詳細……左隻の南限には、山崎付近の景観……石清水八幡宮や宝積寺……特に淀付近の景観はC群にのみ見られる……伏見城は描かれないが、右隻には方広寺が大きく描かれる……金雲に区切られることなく、鴨川は屏風の中心を左上から右下に斜行して流れている……芝居小屋や娯楽が四条や五条に多く描かれる……石不動は、他の諸本が懸造の様に描かれるのに対し、門と堂を組み合わせた平地の寺院として描かれている⁵⁸」

「高津古文化会館B本は他のC群の諸本とは異なる点が多いが、淀付近の景観を描いている点からC群に分類……河合家本の場合……淀付近の景観が描かれていないが……他ランドマークの配置の構図は先の諸本と近似……淀などの遠景が描かれなかった背景には、行列を大きく描く必要があったためと推定される⁵⁹」

「萬野A本とシアトル美術館本は同一粉本をもとに描かれていると推定……林家本、久保惣本も……同一粉本をもとに描かれている可能性が……グルーバー家本、神戸市博本もこれらに近

い景観構成……同一の粉本を用いている可能性が考えられる……
大阪市美本は河合家本、林家本、久保惣本、シアトル美術館本、
グルーバー家本、萬野A本、神戸市博本に近似しているが、他の
諸本には描かれないランドマークが描かれるなど、同一粉本を用
いているとは考えにくい⁽⁶⁰⁾」

「C群は……その描写範囲が広く、多くのランドマークを描い
ている……右隻には祇園祭が印象的に描かれ……豊臣氏による京
都改造から、江戸初期にかけての京都における事業を反映してい
る点にも留意しなければならぬ……諸本の数が格段に多く、大
量に制作された系統であった可能性がある⁽⁶¹⁾」

以上、両度の科研成果から、大阪市美本を含む同系統作品群のラ
ンドマーク比定、景観描写に関する特徴の指摘を抜粋引用した。

九作例が提示されたC群について、以下本稿では「科研C群」と
呼ぶこととする。さらに一点、ロイヤル・オンタリオ美本もこの系
統に入る作品であろうと推察される。また、大阪市美本と他本との
異同、関係性に一定の整理が試みられているが、従来の美術史から
の言及を超えた指摘としては以下のような事項に整理できるであ
ろう。

- (一) 二条城の西域に広い田園風景がある。
- (二) 石不動を平地の寺院として描く。
- (三) 大阪市美本だけに描かれるランドマークがある。
戸名瀬の滝、方広寺鐘樓
- (四) 大阪市美本には描かれないランドマークがある。
農村の鎮守らしき社
- (五) 金閣を大市美本は正確に二重に描く。

萬野A本、神戸市博本は三重の塔のように描く。

(六) 大阪市美本が最も詳細かつ正確にランドマークを描く。

(七) 大阪市美本は諸本とは異なる粉本による。

(八) 高津B本、河合家本を同一系統に分類する。

以上、本章では、近世風俗図屏風、絵画史料、類型という三つの
視点から、大阪市美本がどのように見られてきたかを紹介し、その
基本的なプロフィールを再確認した。次章では従来の指摘、言及に
対する総合的な検証を行うことを念頭に置きつつ、科研C群諸本と
の関係性を特徴づける場面を中心に大阪市美本の分析を試み、その
特性を明らかにしてゆくこととする。

Ⅱ 大阪市美本はどのように見るべきか

一 左隻

(一) 洛西地域

科研C群に含められた高津B本や河合家本をどう位置付けてゆく
かは今後さらなる検討を要すると思われるものの、大阪市美本と林
家本以下諸本との類型的な相関性はほぼ固まったといえる。ととも
に、大阪市美本が諸本とは異なる粉本に基づいていることも観測さ
れるまでになった。科研C群における大阪市美本の位置はどう見定
めるべきだろうか。まず基本的な景観構成の面から検証してゆきた
い。

林家本、神戸市博本、萬野A本は具体的なランドマークの対応関
係だけではなく、その金雲構成(本数、長さ、太さ、曲折方向、加

飾技法、地理的配置)までも含めた型紙的な相似性を示しているのに対して、大阪市美本は俯瞰視点が低くなり、ランドマーク対応、金雲構成において明らかに諸本と乖離している。とくに左隻では景觀構成の変容が容易に見て取れるはずである。

この系統の景觀構成の大きな特徴が左隻の淀、八幡に至る洛外西南域への視野拡大であることは繰り返し指摘されてきたが、大澤、加藤両氏は新たに二条城の西方に広がる田園風景をあげた。ここは先出の奥田氏が、岡崎を中心とする東山一帯とともに、諸本で農耕風景が描写される代表的な地域として抽出した場所(洛西一帯)である。

大阪市美本の左隻三扇、五扇目、画面中段に展開される田畠がそれである。また同六扇目の東寺周辺にも広い耕作地が描かれており、他本の閑散とした田畠の描写に比べ、農耕風俗の描写に対する積極性において際立っていることを先に確認した。つまりこれら場面の挿入が、左隻の景觀構成を大きく変容させる要因のひとつとなっている。

その影響は大きい。まずは、東寺が五扇目に割り込むように大きく右へ押し出されたのがわかる。さらにそのせいであろう、他本では東寺の右上に並び建っていた寺院、つまり林家本の貼札に「尼寺」とある大通寺の一部と門が、東寺の右手に無理やり接合されたような不自然な状態で描かれるようになった。⁽⁶²⁾ 独立した寺院としての姿は不明瞭ではあるが、他本の描写から屋根の並びでなんとかとらえる。

もうひとつの要因は、大堰川以西の洛外景觀の拡大化である。つまり大堰川の最上流地点と天龍寺を三扇・四扇目の境まで一扇分程

度右へ移動させたことに加え、大堰川の流路を画面下方へ大きく張り出すように描き、右岸の法輪寺、松尾社方面にも十分なスペースを与えた。上述の農耕風景の展開と合わせ見ると、大堰川をはさんだ洛西全体の景觀描写がスペース的に著しく引き伸ばされたことがわかる。

この影響を受けて、二条城以西の遠景にある社寺等の主要ランドマークがそれぞれ他本より一扇分ほど右へずれてゆき、最終的に鞍馬寺が右隻六扇目最上段に押し出されてしまうのである。寛永期作例に一般的となる境界設定の特性という内藤氏の指摘が想起されるが、鞍馬寺がこの位置に入ったことで右隻からは比叡山が消えることになった。やはり中景も同様、太秦広隆寺と西院が大きく右へ押されて神泉苑の上方に位置するようになっていく。

また大澤、加藤両氏が大阪市美本には描かれないランドマークとしてあげた「農村の鎮守らしき社」というのは夷森のことである。⁽⁶³⁾ 【図5】が林家本に描かれる夷森であるが、貼札に「梅ノ宮」とあるのは誤りである。洛西全体の拡大により二条城までの空間を整理する必要が出てきた大阪市美本では夷森周辺が割愛消去された。他本においては壬生寺とその周辺の景觀を特徴づけていた御土居も切断されて存在感が後退するなど、洛西、洛南の景觀構成は大きく変容を遂げている。⁽⁶⁴⁾

(二) 金閣

続いて個々のランドマークに目を移す。金閣は一扇、二扇目の画面上方に描かれる【図6】。先到大澤、加藤両氏による「大阪市美本の金閣は正確に描かれている」、「萬野A本、神戸市博本は三重塔の様に描いている」との指摘を引いたが、大阪市美本ほかどれも、

金閣は正確に描かれてはいないことを確認しておきたい。

金閣の本来の姿は、第一層と第二層の間に屋根を設けない三層構造であるが、十七世紀前半の主要な洛中洛外図でこれを正確に描いたものではなく、二階建（A型）、三層屋根（B型）のいずれかに分類されることはすでに奥平俊六氏が指摘している⁽⁶⁵⁾。

大阪市美本の金閣は、科研C群諸本では唯一のA型に分類される。

第一層の西側に突き出るのは釣殿（漱清）だが、多くの洛中洛外図における例とは異なり東側（画面手前）にも向くように類似の建屋が取り付く。大阪市美本がもつとも詳細、かつ正確にランドマークを描いているというよりも、先述の内裏建築や東寺周辺から洛西地域の変容、後述の方広寺などと合わせ、粉本的に独自の性格を有する一本であることを示している。

（三）神泉苑

四扇目中ほど、二条城に接して描かれる苑池が神泉苑である【図7】。大阪市美本で最重要となるランドマークのひとつであるが、従来はとくに注意を払われてこなかった。

神泉苑は応仁の乱で衰退した後、慶長七年（一六〇二）に始まった二条城造営により苑地の北方を大きく削られ、さらに荒廃が進んだ。慶長十二年から元和年間にわたって筑紫の僧覚雅（快我とも）、京都所司代板倉勝重らにより復興され、東寺（宝菩提院）に属する寺院となった。『宝永華洛細見図』等の挿図にみえる池中の中島に建つ多宝塔（二重塔）はこの復興時の建築（後の天明大火で焼失）で、科研C群中では大阪市美本、高津B本に姿が写されている。重要なのはその堂塔供養が元和九年（一六二三）十一月（『義演准后日記』）とわかることである⁽⁶⁶⁾。

同年八月には誓願寺の堂塔供養もあったが、大阪市美本では誓願寺にまだ三重塔はみられない。林原本や科研E群諸本（『片岡氏考察の「司馬家本型類型」』も同様の状況を示していて興味深いが、改築前の二条城を描く大阪市美本の景観年代を単純に推すならば、元和九年から寛永三年（一六二六）前後にかけての数年間に絞ることができであろう。

ともあれ、この多宝塔の描写から、少なくとも大阪市美本の景観年代上限については元和九年と定めることができる。これにより従来の指摘にも示唆を見出してきた景観類型としての後発性、粉本の独自性等に整合性が得られたといえるだろう。

（四）その他

左隻ではやはり西本願寺が特に重要度の高いランドマークである。表門二重堀、北に御影堂、南に阿弥陀堂の配置自体は、元和三年（一六一七）の伽藍焼失以前の姿をベースにした描写であることは間違いない。伽藍焼失の翌年には仮阿弥陀堂が建てられているが、寛永十三年（一九三六）になってようやく御影堂再建（正保二・一六四五年に御影堂大門再建）が果たされるのであり、この間の西本願寺はおよそ整わない寺観を呈していたはずである。元和三年以降、御影堂再建の頃までに制作された洛中洛外図において、伽藍焼失以前の西本願寺があるべき姿として写されて（代用されて）いても一向におかしくはない。やはり問題となるのは、科研C群諸本の中でもひととき詳細に描かれた飛雲閣であろう。その出現と大阪市美本の制作年代、制作背景との関係をどう読むのか、が重要である。すでに断ったように、この問題については別途考察を進めており稿を改めたい。

また淀についても同様で、淀城天守は描かれてはいないが、いま寛永二年以前の景観との即断は控えたい。科研C群諸本の描写も意外に振幅がみられるので、これについても関係史料の精査をもって報告したいと考える⁽⁶⁷⁾。

二 右隻

(一) 上賀茂社

右隻では左隻のように大がかりな景観構成の改変点は見当たらないが、科研C群諸本との相違として、六扇目上方に配された上賀茂社の描写があげられる。大阪市美本では鴨川東岸に馬場と社殿をとらえ、競馬とその見物人らで賑わう情景をかなり大きくとらえている【図8】。

他諸本ではやはり同六扇目、鴨川の中洲に境内と参詣人が描かれ、門の東には池（流路）をまたぐように小社が建つ。ただしこれは上賀茂社ではない。林家本の貼札に「御手洗」とされるように、下鴨社が描かれているのである【図9】。玉垣を巡らせた小社は本殿の東に建つ「井上社」（御手洗社）であつて、上賀茂社の橋殿（舞殿）や片岡社ではない点に注意が必要である⁽⁶⁸⁾。この区別は、勝興寺本の右隻六扇目の下鴨社、左隻一扇目の上賀茂社の図様対比が参考になるだろう。

科研C群中、唯一、下鴨社ではなく、上賀茂社を選択した大阪市美本の狙いは明らかであろう。参詣人もまばらな下鴨社頭よりは、競馬でにぎわう上賀茂社頭を描くことで、画面に風俗画らしい活気を吹き込もうという意図が働いたに違いない。

大阪市美本に描かれる耕作地には遊樂的な昼餉場面が強調され、

和様の耕作風俗図からの影響があるとする奥田氏の指摘を先にみた。名所ならばなおさらそこに遊樂の華やきがなければならぬし、賀茂競馬というモチーフの選択は独立した風俗画主題（賀茂競馬図）からの影響関係としても理解しやすい。祇園祭礼（祇園祭礼図）との関係としては当然、洛中洛外図諸本では最多を誇る山鉾十六基の描写に直結するだろう。このような大阪市美本の作画姿勢には、同時代の祭礼・名所遊樂図系主題の流行が色濃く反映されていると考えてよいのではないだろうか。

(二) 芝居小屋

林家本、神戸市博本、大阪市美本、萬野A本に描かれる小屋を整理すると【表1】のようになる。林家本、神戸市博本の「不明」は舞台を背面から描写するか、舞台は見えても演者が見えず、ともにそれほど密度の濃い描写をみせていない。一方、大阪市美本では小屋、舞台の構造、役者、観客の所作、小屋周辺のにぎわいなどをはるかに入念に描写する。上演内容も多様化し、芝居興行の中心地として四条河原の優勢が明確になってきていることがわかる。

大阪市美本ほかの歌舞伎小屋の櫓幕の紋に注目し、田沢裕賀氏は次のように述べている。

【表1】科研C群諸本の芝居小屋

場 所	五条橋詰（五条河原）		四条河原			
	東詰	西詰	東詰		西詰	
作 例	林家本	人形浄瑠璃	不明	歌舞伎 (下がり藤)	不明	——
	神戸市博本	狂言？	不明	狂言？ (白富士・さと志ま)	不明	——
	大阪市美本	歌舞伎 (下がり藤)	——	能	——	放下 歌舞伎 (富士)
	萬野A本	——	——	歌舞伎 (——)	——	——

「基本的な構成を等しくする「洛中洛外図屏風」、大阪市立美術館蔵……と個人蔵（河合家本＝筆者注）……この二作品は、下がり藤など同じ櫓紋が違う場所に描かれていることから、必ずしも、紋で小屋が特定できるほどには記録性はないようだ……ただし大阪市美本の四条橋西の歌舞伎小屋の櫓幕に描かれた富士山は、静嘉堂文庫美術館の「四条河原図屏風」……に描かれた遊女歌舞伎を代表する佐渡島座のものと考えて差し支えないだろう」⁽⁶⁹⁾

【図10】が佐渡嶋座とされる四条橋西の歌舞伎小屋である。例によって刀を担いだカブキモノと茶屋のかかによる「茶屋遊び」を描く。佐渡嶋座は六条三筋町の遊女屋（和尚は佐渡嶋正吉）が興行した座で、多数の遊女による張見世的な舞台が人気を呼び、遊女歌舞伎の象徴的な存在であった。

静嘉堂本の櫓幕の紋は正確には、赤地に白で、「富士」の下に「一文字」である。従来知られている佐渡嶋座の画証は、櫓幕もしくは看板に座名を明示する文字を伴っているのが特徴で、白地に墨で「富士」のみの大阪市美本の紋を同一の座とみなせるかは微妙なところもある。ともあれ、五条橋東詰の遊女歌舞伎にみえる阿国歌舞伎のトレードマーク「下がり藤」の櫓幕とともに、「富士」が元和年間頃には四条河原の歌舞伎小屋をイメージさせる不可欠な意匠と認識されていたことは確かである。

ちなみに神戸市博本には、紋、文字ともに佐渡嶋座と判断できる小屋が四条河原に描かれている【図11】。その櫓幕は赤地に白の「富士」で、「富士」の右には「さと志ま」という白字が微かに判読できる。細画ゆえに静嘉堂本ほど整った図柄ではないが、佐渡嶋座の画証という意味ではこれまで未紹介であろう。

その舞台には袴姿の男を二人描くことから狂言の小屋である可能性が指摘されている⁽⁷¹⁾。左隻の壬生にも壬生狂言を描くなど、神戸市博本は狂言の描写にこだわった感があり、ひょっとすると、初発作品（粉本）では遊女歌舞伎の小屋であったところを演者だけ改変している可能性もあるだろう。林家本ではこの位置に歌舞伎小屋を描いてはいるが、「下がり藤」の櫓幕になり、さらに萬野A本では櫓幕自体が描かれないというようにそれぞれ変質をみせている。

（三）方広寺・豊国社

右隻で大きな存在感を放つランドマークが、一扇／＼三扇目上半に配置される方広寺、および豊国社である。

まず方広寺であるが、先に指摘をみたように、大阪市美本には慶長十九年（一六一四）六月に完成した鐘樓が描かれている【図12】。景観年代の上限とされることもあったが、先出の内藤氏は大仏殿の右手背後に描かれる五輪塔に注目し、これが造立された元和二年（一六一六）八月が景観年代の上限となることを指摘した⁽⁷²⁾。

この五輪塔は豊臣家滅亡後、家康が大仏殿境内に造立するよう沙汰を下した秀吉の墳墓である⁽⁷³⁾。『都名所図会』など地誌の挿図にもみえているが（豊国神社内に現存）、洛中洛外図でこの五輪塔を描く例は大変珍しく⁽⁷⁴⁾、大阪市美本が依拠する粉本が科研C群諸本とは明らかに異なり、内裏や芝居興行地とともに景観年代が相対的に下ることを指し示す描写である。

また方広寺の仁王門は、大仏殿の西面（正面）回廊の中央ではなく、やや北寄りに付いていたことが残された指図類から判明し、仁王門より南側の回廊の方が北側より二十五メートル程度長かった⁽⁷⁵⁾。神戸市博物本や林家本はこの状況に即した描写がなされているのに

対して、大阪市美本では南側と北側の長さが逆転している。大阪市美本の写し崩れというよりも、やはり依拠した粉本自体の性質の違いが表れたと解される。

大仏殿の南に接する妙法院の院家・日嚴院や、豊国社参道脇の智積院を金雲で覆い、その存在を明確に示さない点もやはり独自の描写といえる。廃絶となった豊国社および周辺寺地を家康から下げ渡され、一躍、恨めしいほどの大寺に変貌をとげた妙法院と智積院である。この一帯からなるべく徳川色を忌避するよう求めた屏風発注者の意図によるものと深読みすれば、ことさらな秀吉墳墓の描写もうなずけるところであるが、その具体的な事情、背景を今のところ想定するにはいたっていない。

ここでやはりまた神戸市博本に目を転じたい。その方広寺大仏殿の下重の屋根は正面中央が唐破風になっており、大阪市美本同様、慶長十七年には大方完成していた秀頼再建の大仏殿を描くと判断される。⁽⁷⁶⁾ 大阪市美本にみられる鐘楼(慶長十九年)、五輪塔(元和二年)はいずれも描かれないが、逆に大阪市美本には描かれない豊国社参道の鳥居(および楼門)がみえている。

松島仁氏は、個人蔵本、堺市博物館本、バークB本など仕込絵関係にある洛中洛外図では、慶長二十年(元和元年)七月に沙汰が下された豊国大明神の神号停止、社頭一円破却の前後で、豊国社参道の鳥居の有無が意図的に描き分けられていると指摘して次のように述べた。

「豊国大明神の神号停止と社頭一円の破却にともない、鳥居のない豊国社、つまりもはや神にあらざる豊国大明神をえがくよう、粉本が改訂されたことを示す……同様のことは、同じ系統の粉本

によった作例ながら、豊国社の鳥居をえがく神戸市博物館蔵の六曲一双屏風と、えがかない大阪市立美術館所蔵および文化庁所蔵(旧萬野美術館A本)の六曲一双屏風の間にも認めることができる」⁽⁷⁷⁾

すでに大阪市美本が依拠する粉本が科研C群諸本とは異質なものであることを述べてきた。つまり、神戸市博本と大阪市美本との対照からは、それぞれの豊国社鳥居の有無を同系の粉本を意図的に改訂した結果として読み取ることは適切ではない。⁽⁷⁸⁾ 神戸市博本の豊国社が、慶長二十年七月以前の状況を念頭においた描写である、という解釈にとどめるべきだろう。それでもそのことは、科研C群の神戸市博本、林家本、萬野A本、久保惣本、東京富士美本等に継承された景観類型をもつプロトタイプのな作例の出現が、少なくとも慶長末年あたりまでさかのぼりうることを示唆する。

それにもっとも近い位置にあるのが神戸市博本であることは、狩野派風のかつちりした構成力と、未だ野卑な生気を帯びた魅力ある人物描写からも間違いないところだろう。神戸市博本はこの一群では唯一、山鉾巡行を描かず、西本願寺表門を二重塀とせず、飛雲閣らしき楼閣建築も描かない。科研C群中でその画面は一段と景観年代をさかのぼらせる可能性がある。

三 表現

次に、大阪市美本の各種表現について確認する。人物描写については、左・右隻の主要絵師が別筆であることがまず第一に看取できる。

左隻は武家が中心で、もっとも上手の主要絵師は狩野派風を示し、

武家階層（男・女）、宗教者階層を描く。農・工・商業者、及びその他庶民階層を描く絵師はまた別筆である。右隻は庶民階層が中心で、もつとも上手の主要絵師はいわゆる町絵師風が濃くなり、町衆（男・女）やカブキモノを描く。農・工・商業者、及びその他庶民階層を描く絵師はやはり別筆である。それぞれの階層内での主従の差によってもまた絵師の表現レベルが分かれる。このような複数絵師による分担制作に町絵師工房制作の特徴がよく表れている。

【図13】は左隻の武家で、起筆に軽く打ち込みを入れた弧線を頭頂から左右に振り分け、目の下で筆を継いで、卵形をした細面の輪郭を描き起こす。のどに短横線を引く。鼻は起筆にやや打ち込みがあり、両目の間から「し」の字、「ム」の字の鼻梁を引き、ごく短い縦線、また点を打って小鼻をくくる。細面にしては鼻が大きい。目は短横線、斜線、小点など。上唇に短横線、下唇に弧線を引き、総じて開口してにこやかに微笑む表情を作る。

【図14】は右隻のカブキモノと若衆で、カブキモノは頭頂から後頭部への弧線と、額から目尻へくぼみ、頬へと膨らむ弧線で幅広の顔の輪郭を描き起こす。月代、頬、顎とも豊かに張る。のどに短横線はない。鼻梁は眉の近くから長めに引かれ、すらつとしている。かぎ状にくくられた鼻先は膨らみに乏しく、やや斜め上を向く。目は短斜線で目尻をつり上げるように引かれ、唇は太・細の弧線三本を重ねて嬉々とした笑顔を作る。カブキモノらしい野卑な雰囲気は希薄である。

【図15】は左隻の武家女性像、【図16】は右隻の町衆女性像で、いずれも各隻のもつとも上手の主要絵師による。武家、町衆それぞれの男女を分担する左右隻の主要絵師がまったく異なる味わいの描写

を見せていることがわかる。左隻の主要絵師のほうが一世代年長かとの印象がもたれる。

自然景の表現については、山肌、土坡にはがっちりした皴法は用いず、緑青のグラデーションに金泥、金砂子のハイライトを交え、ポリウム感を巧みに表現する。また、【図17】のように土坡と樹木を前後左右に重ねながら奥行のある空間を意識した風景表現が何ヶ所かみられ、町絵師としてはかなり手慣れた漢画系の画技を披露している。

金雲の加飾は、その輪郭に五列の珠点、内部に雲形の置上げを配するのを基本とする。ただし金雲によつては、五列の珠点と雲形を置上げた金雲が、珠点が消え雲形だけを配する部分へと連続し、さらに珠点も雲形も消え金箔だけの部分へと連続する、といった形制の変化を示し、三段階の加飾を交える工夫をみせている。

問題は、従来指摘されているように、林家本と同一工房による制作というほどには、人物描写、風景表現、金雲加飾において親近性が看取できないことである。大阪市美本の人物は総じて口を開いて微笑み、明るい快活さをみせる。これとは対照的に、一文字に口を結んだ林家本の人物には微笑みがなく、原本にあったやや古様な面貌表現を伝えているが、仕込絵独特の画一化が目立つ【図18】。着衣や自然景の表現でも林家本の平板化は顕著である。その一方、極めて詳細に文様を描き込んだ祇園会山鉾の懸装品【図18】など、細部の装飾的表現にはみるべきものがあるが、制作年代としては大阪市美本をそうさかのぼるものではない。いずれにせよ、科研C群諸本に対する大阪市美本の独自性が明らかになつてきたこの時点では、制作工房の直接的関係づけから両本を切り分けてとらえ直す必

要があることを強調したい。⁽⁷⁹⁾

四 結語―大阪市美本の特性と科研C群での位置づけ

それでは、第二定型洛中洛外屏風として的大阪市美本の特性、科研C群での位置づけとしては、どのように結論づけることができるだろうか。ここまでの指摘、検証、考察の要点は次のようにまとめられるだろう。

①神泉苑に多宝塔が描かれ、景観年代上限を元和九年(一六二三)とする。

②狩野派の素養をもつ絵師も含んだ漢画系町絵師工房の制作。卑俗味や享楽性を強調しない穏やかな性格の人物描写、和漢折衷様式は林家本にも近い感覚があるが、同一工房とまではいえない。

③安定回復する世相の繁栄ぶりに関心を強め、伏見城が消え、將軍参内行列の描写が形骸化する。芝居興行地として四条河原の優勢を示し、遊女歌舞伎を中心に発展ぶりを入念に描写する。

④遊樂的な農耕風俗の挿入、祇園祭礼の多数の山鉦配置、上賀茂社競馬の選択など、科研C群中では独自の遊樂図志向を明確に示し、背景に祭礼・名所遊樂図系作品の流行が考えられる。

⑤左右隻景観の境界設定、洛西地域、金閣、西本願寺、内裏、芝居興行地、方広寺とその周辺など、科研C群諸本とは粉本の性格の違い、景観年代の下降を示す描写が多々確認できる。

右記の①に関連して景観年代下限の目安を拾ってみると、寛永三年(一六二六)改築前の二条城を描くこと、清水寺の朝倉堂が本堂回廊横の石垣積みみの台地の上に建ち、寛永六年同堂焼失以前の景を

描くことなど、寛永年間前半までに限られることは注目できよう。⁽⁸⁰⁾

加えて、高台寺の貼札には「こうとくし」、つまり高台寺の前身である「康徳寺」の名が墨書される。同様のケースは個人蔵一隻本があげられる程度で非常に珍しい。⁽⁸¹⁾制作当初の表記を引き継ぐ墨書とみられるが、「高台寺」への家康による寺領安堵、伽藍整備は慶長十一年(一六〇五)のことであり、元和末にいたって未だ「康徳寺」が一般的な呼称であったとは思えない。この貼札墨書の意図を、寛永元年九月まで存命であった高台院の名を憚るための呼び慣わしと解することが適当であれば、大阪市美本の制作(あるいは原本の構想時期)を寛永初頭の数年中と推定することも可能である。表現様式的にもこの頃の制作と考えて矛盾はなからう。

先に大澤氏が科研C群を「諸本の数が格段に多く、大量に制作された系統であった可能性がある」と述べたように、この一群に継承された景観モデルは非常に汎用性が高く、その成立(おそらく慶長末、狩野派による)以来、さまざまな工房で長期にわたり粉本として利用され、各趣の仕込絵制作が行われてきたとみられる。大阪市美本の景観類型のベース、出所も間違いなくそこに求められる。

ただし大阪市美本はそのモデルに一〇〇%依存した仕込絵として世に出たのではなかった。むしろ次代の元和寛永年間初めに登場してくる洛中洛外図、祭礼・名所遊樂図などの摂取を巧みに図りながら、独自の改良を施して仕上げられた寛永初頭制作の作例であると推考される。元和後期型エンジンを積んだ改造タイプといえる大阪市美本のような画面も、やがて後水尾天皇の二条城行幸という寛永型エンジンを積んだ新種に席巻され、漸次その需要を衰退させていったのではないだろうか。

おわりに

大阪市美本の新たな位置づけを求めながら進めてきた本論をここでひとまず終える。

従来の各専門分野からの指摘、言及を可能な限り網羅的に拾いだし、検証することを心掛けたが、今回は町屋の形態に関する分析には及びえなかった。林原本を中心に建築史からの蓄積が相当進んでいると察せられるところであり、西本願寺、および飛雲閣の描写読解を目指す続稿に向け、諸職、群像の描写とともに取り組みを期したいと考える。まずは大方からのご教示をお願いするものである。

また、科研C群の主要作品である林家本、萬野A本、神戸市博本、久保惣本についても断片的に言及してきた。林家本、萬野A本は「洛中洛外のプリマドンナ―遊楽と風俗画・17世紀―」展（兵庫県立歴史博物館、平成五年）の開催に関わって作品調査させていただいた作品である（林家本は出品）。また神戸市博本は、厳島と鞍馬がセットになった珍しい名所風俗図（広島県立美術館ほか蔵）について考えを巡らせていた平成十四年に作品調査させていただいた作品である。また久保惣本は一昨年、勤務館で洛中洛外図に関する「美術講座」を準備するに際して作品調査させていただいた作品である。

それぞれの機会に得られた所見を研究成果に仕上げることもなく時が過ぎたが、このたび大阪市美本を再考するにあたり、はるか当時の調査記録がたいへん有効な分析材料になった。ご所蔵者、ご所蔵機関、並びに作品寄託先のご担当者に改めて感謝申しあげる次第である。

林家本、久保惣本、大阪市美本はいま大阪にあり、萬野A本はかつて大阪にあった。二十数年の間、知らず知らず科研C群諸本との縁を結んできた自らの身もまたいま大阪にある。未調査の作品への知見を抜けつつ、いずれこの一群を総括する論をなしたいと考えるものである。

さいごに、本稿への写真掲載をご許可いただいた作品ご所蔵者、ご所蔵機関に対しまして厚く御礼申し上げます。

註

1 本科研の研究成果については左記の①～③を参照。なお、③は今日に至る江戸時代洛中洛外図に関する研究を三期に分けてその内容を総覧、総括し、①を「第二定型科研」、②を「風俗画科研」と呼んで、その成果を研究史全体の中で位置づけている。両科研を区別する場合、本稿においてもこの呼称を用いる場合がある。

①『第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究 二〇〇二～二〇〇四年度 科学研究費補助金 基盤研究(A)(1) 研究成果報告書』、研究代表者・黒田日出男、平成十七年。②『中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究 二〇〇五～二〇〇九年度 科学研究費補助金 基盤研究(S) 研究成果報告書』、研究代表者・黒田日出男、平成二十二年。③黒田日出男「江戸時代の洛中洛外図屏風と「屏風屋」―洛中洛外図屏風の研究史ノート―」、『立正大学文学部研究紀要』二十九号、平成二十五年。

2 「三館共同企画展 洛中洛外図屏風に描かれた世界」、群馬県立歴史博物館、米沢市上杉博物館、林原美術館、平成二十三年～二十四年。『同展図録』、同上三館、立正大学文学部、平成二十三年。

3 前掲註1③黒田「同論文」。

4 ①飛田範夫「西本願寺滴翠園の変遷」、『史迹と美術』五三二号、昭和五十八年。②岡村喜史「洛中洛外図に見る本願寺」、『国史学研究』十七号、平成三年。③小野健吉「滴翠園―洛中洛外図から読む築造年代―」、『奈良国立文化財研究所年報 一九九七―I』、平成九年。④『名勝滴翠園記念物保存修理事業報告書』、宗教法人为本願寺、平成二十一年。

- 5 加藤繁生「飛雲閣を採して①本願寺「御亭」と国宝「飛雲閣」(上)」、「同前(下)」、「飛雲閣を採して②飯貝本善寺所蔵「飛雲閣古図」について」、「飛雲閣を採して③洛中洛外図に描かれた飛雲閣」、「飛雲閣を採して④本願寺文書に現れた飛雲閣(飛雲亭)」、「飛雲閣を採して⑤「飛雲閣」とは何か」、「飛雲閣を採して⑥飛雲閣の生まれた場所(上)」、「同前(下)」、「史迹と美術」八二五号、八三二号、平成二十四年、二十五年。
- 6 展覧会図録『田万コレクション 東洋美術展』(大阪市立美術館、昭和四十四年) No. 168。
- 7 武田恒夫「京名所風俗図」、展覧会図録『京の美術 京名所風俗図』(京都国立博物館、昭和四十五年) No. 2。
- 8 ①展覧会図録『洛中洛外図』(京都国立博物館、昭和四十年)、武田恒夫「図版解説No. 7」。②京都国立博物館編『洛中洛外図』(角川書店、昭和四十一年)、武田恒夫「グラフィア解説No. 12」参照。
- 9 林家本の図版は後掲註11「同書」No. 53・66 (No. 52と67の図版が入れ替わっているので注意)のほか、以下の近時展覧会図録を参照。『特別展 修理後初公開 洛中洛外図に描かれた世界—江戸文化創世の地・京都へのあこがれ—』(岐阜市歴史博物館、平成二十二年)、『テーマ展 世情 大阪城天守閣収蔵風俗図屏風にみる』(大阪城天守閣、平成二十四年)。
- 10 辻惟雄『洛中洛外図』(日本の美術・一二一号)、至文堂、昭和五十一年。引用同右。
- 11 辻惟雄「洛中洛外図の展開—林原美術館本・舟木本を中心に—」(『近世風俗図譜 第四巻 洛中洛外(二)』、小学館、昭和五十八年)にも同様の言及あり。
- 12 『日本屏風絵集成 第十一巻 風俗画—洛中洛外』(講談社、昭和五十三年)、狩野博幸「図版解説No. 25・26」。
- 13 前掲註11「同書」、狩野博幸「図版解説No. 52・53」。
- 14 前掲註11「同書」、狩野「同図版解説」。
- 15 ①展覧会図録『都の形象 洛中洛外の世界』(京都国立博物館、平成六年)、狩野博幸「図版解説No. 17」。②京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形象—洛中洛外の世界』(淡交社、平成九年)、狩野博幸「図版解説No. 10」。
- 16 前掲註15②「同書」、狩野「同図版解説」。
- 17 前掲註15②「同書」、狩野「図版解説117」。
- 18 前掲註15②「同書」、狩野「図版解説118」。
- 19 前掲註15②「同書」、狩野「図版解説119」。
- 20 前掲註8②、註9各「同書」。
- 21 前掲註11「同書」、小沢弘「図版解説No. 64・65」、同上「図版解説No. 80・81」。
- 22 東京富士美本のカラー図版については以下も参照。『東京富士美術館名品選集』(東京富士美術館、平成二十一年) No. j-18。展覧会図録「特別展 東京富士美術館&奈良県立美術館所蔵 江戸絵画の精華」(奈良県立万葉文化館、平成二十五年) No. 5。
- 23 前掲註15②「同書」、狩野「図版解説No. 11」。
- 24 前掲註15②「同書」、狩野「図版解説No. 12」。
- 25 前掲註11「同書」、狩野「同図版解説」。
- 26 前掲註11「同書」、狩野博幸「図版解説No. 66・67」。
- 27 前掲註8②「同書」所収、武田恒夫「概説」。
- 28 ①黒田日出男「王権と行列・描かれた〈行列〉から」、「朝日百科・日本の歴史別冊 歴史を読みなおす17 行列と見世物」(朝日新聞社、平成六年)所収。②同上「洛中洛外図屏風の主題表現と注文主そして伝来—新出洛中洛外図屏風と林原美術館本洛中洛外図屏風—」、「立正大学文学部研究紀要」二十五号、平成二十一年。③狩野博幸『大江戸カルチャーブック 新発見・洛中洛外図屏風』、青幻社、平成十九年。④水本邦彦「洛中洛外図の中の京都」、「新しい歴史学のために」二二九号、平成十年。⑤大塚浩美「江戸時代の洛中洛外図の主題と構図について」、「歴史評論」六二一号、平成十四年。⑥川嶋将生「祇園祭 祝祭の京都」、吉川弘文館、平成二十二年。
- 29 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 30 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 31 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 32 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 33 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 34 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 35 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 36 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 37 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 38 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 39 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 40 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 41 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 42 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 43 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 44 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 45 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 46 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 47 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 48 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 49 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 50 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 51 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 52 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 53 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 54 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 55 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 56 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 57 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 58 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 59 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 60 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 61 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 62 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 63 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 64 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 65 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 66 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 67 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 68 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 69 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 70 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 71 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 72 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 73 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 74 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 75 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 76 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 77 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 78 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 79 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 80 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 81 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 82 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 83 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 84 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 85 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 86 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 87 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 88 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 89 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 90 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 91 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 92 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 93 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 94 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 95 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 96 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 97 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 98 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 99 前掲註27⑤大塚「同論文」。
- 100 前掲註27⑤大塚「同論文」。

参内とされているのは誤りで、慶長十六年は家康の参内である。
また(一)のなかでも、神戸市博本は徳川和子入内の行列を描くとみる向きもある。『南蛮美術セレクション——神戸市立博物館——』(神戸市立博物館、平成十年)、図版解説No.11。

近時の考察は以下のとおり。第二定型作品の祇園会の描写についての言及は少ない。①安達啓子「洛中洛外図の系譜と展開——附・洛中洛外図屏風と祇園祭礼場面小考——」、②八反裕太郎「祇園祭礼図の系譜と特質」、いずれも植木行宣・田井竜一編『祇園囃子の源流——風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ——』(岩田書店・平成二十一年)所収。③同上「神宮文庫蔵「祇園祭之図」について——祇園祭礼図の成立に関する試論」、『風俗絵画の文化学Ⅱ 虚実を写す機知』(思文閣出版、平成二十四年)所収。④廣海伸彦「出光美術館所蔵「祇園祭礼図屏風」の研究」、『出光美術館研究紀要』十八号、平成二十五年。

小川慧里子「第二定型林原家本洛中洛外図屏風に描かれた布帛類についての研究」、前掲註1①『同書』所収。

小川氏が諸本の山鉦を一覧化した表2は、大阪市美本について剣鉦を見落し、逆に描かれない白楽天山をカウントしている。また芦刈山は木賊山、郭巨山は太子山とみなすのが正確であろう。

田井竜一「画像資料にきく「祇園囃子」」、前掲註31①②『同書』所収。

データベース「画像資料にきく「祇園囃子」」一覧No.32、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、伝音アーカイブス。

前掲註9辻『同書』。

①守屋毅『季刊論叢日本文化5「かぶき」の時代——近世初期風俗画の世界——』、角川書店、昭和五十一年。②内藤昌『角屋の研究 解説・資料』(『角屋』付録2)、中央公論社、昭和五十八年。

慶長十二年の修築以前の北野社を描く延命寺本には五条橋西詰だけに芝居小屋がある。内藤氏は、浅井了意の『東海道名所記』が阿国がややこ踊りを始めた場所として記す「五条のひがしの橋づめ」は、「五条橋の東橋詰」ではなく、「五条の東限の、西橋詰」とも解せるとし、延命寺本の五条橋西詰の芝居小屋が、慶長中期の興行地を反映する描写と考えた(前掲註36②内藤『同書』)。

比較的近年になって、小笠原恭子氏も延命寺本的小屋を考察している(小笠原恭子『阿国かぶき前後』、岩田書店、平成十八年)。小屋の舞台の奥にみえる小さな社殿に注目し、橋詰八幡の境内と特定、やはり「東詰」

にはこだわらず、五条橋西詰に阿国芸団の初期の舞台があったことを伝える描写と推論した。また、阿国の歌舞伎踊りの興行地として北野に先行する可能性にも言及した。

五条橋西詰に歌舞伎小屋を描く作例としては、バークB本、堺市博本などのほか、後述の科研C群の久保惣本(舞台は茶屋遊び)がある。後水尾天皇の二条城行幸を描くなど制作年代は下がる作例だが、先行作例(粉本)の状況を伝えている可能性がある。

歌舞伎小屋の櫓の変遷については、安部彩子「風俗画に描かれた初期歌舞伎の櫓」(『フィロカリア』十八号、平成十三年)とその注に引く劇場史、歌舞伎史の先行諸研究を参照。

なお、『カブキモノ』と初期歌舞伎の図像研究 平成十七年・十九年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書(研究代表者・奥平俊六、平成二十年)では、歌舞伎図、四条河原図のほか、大阪市美本を含む洛中洛外図三十一作例中の歌舞伎小屋の描写内容を一覧化している。

①奥田敦子「洛中洛外図屏風に描かれた農耕風景——新出開善寺本の紹介を兼ねて——」、『東京学芸大学造形芸術学・演劇学研究紀要 造形芸術学・演劇学』三号、平成十三年。②同上「洛中洛外図屏風の農耕風景」、『美術史』一五八号、平成十七年。

奥田氏は②「同論文」で大阪市美本について、「筆者は狩野派に属する絵師

【別表】 大阪市美本の四季景物

季節	春			夏		
月	1	2	3	4	5	6
【景物】(隻・扇)	【萬歳】左4		【桜花】右1~3・6 【鶏合】左5 【田起こし】左4~5		【賀茂競馬】右6	【祇園会】右3~5 【鮎とり】右6 【鵜飼】右1
季節	秋			冬		
月	7	8	9	10	11	12
【景物】(隻・扇)	【孟蘭盆燈籠会】左6		【脱穀・精米】左6 【小鷹狩】左4~5 【紅葉】左1~5			【鉢叩き】左2 【黒木売り】左1

①内藤昌「近世洛中洛外図屏風の景観類型―新出図の考察を契機として

高屋氏作製の3D・CG模式図のうち、神戸市博本、萬野A本の上方(東)三分の一ほどの建物は内裏内の建築ではなく、戒光寺、本能寺と続く三条以北の寺町寺院群に相当するのではないだろうか。よって両作品では高屋氏作製模式図の状態よりもさらに省略的に内裏を表現している可能性がある。

高屋麻里子「洛中洛外図屏風諸本の内裏表現の3D・CGを用いた模式化による比較」、前掲註1①『同書』所収。

大阪市美本に特に広い耕作地が描かれる点は、所広秋氏の指摘が早い。所広秋「光明寺所蔵『洛中洛外図屏風』について」、『岐阜市歴史博物館研究紀要』十二号、平成十年。

また、室町期の洛中洛外図屏風から江戸期のそれへ向けて、村落、田畠、四季歳時の描写が減少することは大塚浩美氏の指摘が早い。大塚浩美「研究ノート」洛中洛外図にみる京郊村落、『地方史研究』二二一号、昭和六十三年。

前掲註39②奥田「同論文」。

引用同右。

なお、同氏は①「同論文」で、後掲註42所広秋「同論文」の一覧をもとに洛中洛外図諸本の画中景物の種類・配置の一覧を掲げているが、大阪市美本に関して追加、修正を加え【別表】のように整理し直す。

①高橋裕美子・大澤泉・杉森哲也「洛中洛外図ランドマーク対照表

「洛中洛外図大観」舟木

家旧蔵本」(小学館、昭和六十二年)所収。

③の景観模式図では、東西二四コマ、南北一六〇コマに区分、屏風の左・

右隻各扇の境界線が展開表示され、画面上の位置と地理的な関連性が感

覚的に把握できる。

前掲註45①内藤「同論文」。

前掲註45②内藤「同論文」。

引用同右。

前掲註45①内藤「同論文」。

片岡肇「洛中洛外図屏風の類型について(1)」、『京都文化博物館研究紀

要 朱雀」九集、平成九年。

片岡氏が主たる考察を展開した「第3類―左隻が逆勝手で、右隻が順勝

手のもの」は「司馬家本型類型」と名付けられたが、この類型は各種図

様や描写様式でも相通じる同一工房の仕込絵からなる一群である。その

点、他とは「類型」の意味合いが異なってくる点に注意が要る。

かつて筆者はこの工房によると考えられる複数の風俗画作品について下

記①③で考察した。②で「司馬家本型類型」に入る大分市美術館所蔵「洛

中洛外図屏風」の存在について報告したが、前掲註1①・②『同書』を

はじめ、いまだリストアップから洩れているようである。

①知念理「個人蔵「厳島・住吉祭祀図」―堺市博物館蔵「住吉祭祀図」

のその後」、『広島県立美術館研究紀要』第七号、平成十六年。②同上「厳

島図障屏画一覽」補遺」、『同前』第八号、平成十七年。③同上「住吉絵

断章」、『展覧会図録「住吉さん 住吉大社一八〇〇年の歴史と美術」(大阪

市立美術館、平成二十二年)所収。

①加藤裕美子・大澤泉「洛中洛外図諸本におけるランドマークの検討」、

②大澤泉・加藤裕美子「第二定型本諸本の分類における基礎的考察―ラ

ンドマークの比較を中心に」、いずれも前掲註1①『同書』所収。

前掲註52②大澤・加藤「同論文」。

引用同右。

引用同右。

①高橋裕美子・大澤泉・杉森哲也「洛中洛外図ランドマーク対照表

「洛中洛外図大観」舟木

家旧蔵本」(小学館、昭和六十二年)所収。

③の景観模式図では、東西二四コマ、南北一六〇コマに区分、屏風の左・

右隻各扇の境界線が展開表示され、画面上の位置と地理的な関連性が感

覚的に把握できる。

57 黒田日出男氏はこのC群について、「元和末年から寛永初年にかけての淀と淀城の視線が向いているC群」と記述している。前掲註1③黒田「同論文」。

58 前掲註56②「同論文」。

59 引用同右。

60 引用同右。

61 引用同右。

62 前掲註56①「洛中洛外図ランドマーク対照表(ver.3)」には「た7大通寺／だいとうじ」が立項されているが、科研C群では(ロイヤル・オントリオ美本以外)いずれの作例にもチェックが入っておらず、左隻五・六扇を「●」とする修正が必要である。

63 小敷に囲まれたエビス神をまつる小祠で、現在の中京区壬生森町付近にあったとみられる。『擁州府志』(巻第三)に「恵美須宮 在四条西野。案斯所西宮高明公之宅地也。就西宮之称号而後世還勸請蛭児命者乎。『山城名跡巡行志』(第一)に「夷ノ社 有四条朱雀西二町 夷森 古高明親王第址」、また『都名所図会』(巻之二)の「壬生寺」挿図の遠景に森影を写して「蛭子森」と札書する。幕末・明治の地図にも表記され、ランドマークとして新規立項すべきかと思われる。

64 大阪市美本・左隻四・五扇目中段、田起しの場面の下方に隣接して建つのは壬生寺であろう。貼札はなく、建築としての外観も他諸本とは異なるが、耕作地との位置関係から推定される。

65 前掲註56①「洛中洛外図ランドマーク対照表(ver.3)」「み6壬生寺／みぶでら」には「○」チェックがあり妥当である。「●」でもよからう。ところが、前掲註1②『同書』の「ランドマーク比定」の左隻図版には、三・四扇に位置する広隆寺とみられる位置に「15壬生寺」と落とし込んでいる。「こ7広隆寺／こうりゅうじ」のチェックは三・四扇に「●」で正しいから、図版への落とし込みはケアレスミスであろう。

66 奥平俊六「金閣寺の遊楽」、『寛永文化のネットワーク『隔簀記』の世界』(思文閣出版、平成十年)所収。

67 元和九年十一月二十一日条、『史料綜覧』第十二編。

前掲註56①「洛中洛外図ランドマーク対照表(ver.3)」における大阪市美本のランドマークに関して、本文、註でふれえなかった箇所の疑義等について以下に列記する。なお、本文中にも引用してきた林家本の貼札は、時に誤りがみられるが、ランドマーク比定に際しては有用である。

「き8北野釈迦堂・松梅院／きたのしゃかどう・しょうばいいん」

小笠原恭子氏は右近馬場北寄りの建物を出光本をあげて松梅院と考証しており妥当とみなされる(前掲註37小笠原『同書』)。大阪市美本以下、科研C群諸本「○」チェックだが、右近馬場東側に建物があり、林家本の貼札には「西法寺」(西方尼寺)とされ、科研C群に關しての比定はなお一考を要する。

「き16清水寺／きよみずでら」

「備考」で貼札を「きよみつ 六はら」と読んでいるが、本稿で【図1】とともに掲げた貼札一覧の如く「きよみつろくはう(清水六坊)」が正しい。

「し7七条道場／しちじょうどうじょう」

東本願寺の右に描かれる大きな境内地。科研C群諸本「○」チェックになつてはいるが、時宗金光寺(遊行寺)でよく「●」が妥当。大阪市美本では縮小され不明瞭になつていたので注意。

「た3大覚寺／だいかくじ」

科研C群諸本「○」チェックだが、林家本の貼札には「月ノ輪」とされ、位置的にも愛宕山南東中腹に位置する天台宗寺院・月輪寺とみられる。本項チェックの消去、並びに「月輪寺」の新規立項が必要と思われる。

「ふ4武家屋敷(藤堂邸カ)／ぶけやしき(とうどうていか)」

「寛永十四年洛中絵図」以降、藤堂邸は三条と四条の間、錦小路通りを堀川に西面して存在し、これが三階建望楼をもつ元古田織部屋敷であったことから、外観二重数寄屋造風の楼閣をもつた屋敷が藤堂邸とみなされる(内藤昌・大野耕嗣「近世都市図屏風の建築的研究―洛中洛外図・その5―藤堂高虎邸・武家地の建築」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、昭和四十六年)。大阪市美本の「○」チェックは四扇目ではなく、五扇目に修正すべきであろう。ただし、林家本、神戸市博本などでは三扇目の屋敷を指して「○」チェックになっているが、位置、屋敷の構造とも大阪市美本とは異なる。元織部屋敷が慶長末年の建築とみられることから、粉本的に大阪市美本に先行する画面には同位置に未だ織部屋敷は描写されていなかった可能性がある。

68 神戸市博本、林家本、萬野A本に關しては、前掲註56①「洛中洛外図ランドマーク対照表(ver.3)」「か6上賀茂社／かみがもしや」の「●」チェックを消去し、「し13下鴨社／しもがもしや」に新たに「●」チェック

- を入れる修正が必要である。なお久保惣本、ロイヤル・オンタリオ美本の上賀茂社、下鴨社のチェックは問題ない。
- 69 田沢裕賀『遊楽図と歌舞伎図』（日本の美術・四八三号）、至文堂、平成十八年。
- 70 佐渡嶋座の画証には以下のような作品が知られている。
- 「四条河原図屏風」……静嘉堂本、天桂院本
- 「洛中洛外図屏風」……田辺市美本（司馬家旧蔵本）、歴博D本、京都民藝館本
- 71 藤岡道子「狂言の絵画資料の収集 その二」「洛中洛外図」に描かれた能・狂言、『東洋哲学研究所紀要』二十五号、平成二十一年。
- 72 前掲註36②内藤『同書』、「第一編」注（25）。
- 73 「妙法院文書」、『大日本史料』（第十二編之二十五）、元和二年八月六日条。五輪塔は「馬塚」と俗称されるようになり、明治十年に豊国神社境内に移された。「国泰院俊山雲龍大居士」、「改起立芳墓□□□（梵字） 元和元年八月十八日敬白」と刻されるというが（『京都坊目誌』）、現在、肉眼で全文を判読するのは難しい。五輪塔造立が約丸一年さかのぼることになるが、ひとまず『大日本史料』網文にしたがっておく。
- 74 大阪市美本のほかには「洛外図」（奈良県立美術館蔵）に描かれるのみであらう。阿弥陀ヶ峰山上の秀吉廟墓も描かれており貴重。河内将芳『シリーズ権力者と仏教 秀吉の大仏造立』（法蔵館、平成二十年）参照。
- 75 「大仏殿院復元寸尺関係図」（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告二〇〇九一八 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』所収（図57）、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、平成二十二年）から算出した。
- 76 内藤昌・中村利則「ミヤコの変貌―聚楽第と大仏殿―」、『近世風俗図譜 第九巻 祭礼（二）』（小学館、昭和五十七年）所収。
- 77 松島仁『徳川將軍権力と狩野派絵画 徳川王権の確立と王朝絵画の創生』（ブリュッケ、平成二十三年）「第一部」註「31」。鳥居を描く個人蔵本については以下を参照。馬淵美帆「洛中洛外図屏風」、『国華』一三三八号、平成十九年。
- 78 神戸市博本との仕込絵としての近似からすれば、大阪市美本、萬野A本よりも、林家本、久保惣本、東京富士美本などが比較対象となるが、神戸市博本とは制作環境を異にし、制作年代も下がるこれらの作例では豊国社鳥居は延々と描かれ続けている。松島氏がいうような意味での粉本の改訂が確認できるのは非常に限定的なケースである。

- 79 近時、もと「大坂図」と一双をなしたと推測される「洛中洛外図屏風」について、林家本との様式的近似、元和寛永期の狩野派系工房の関わりなどが指摘されている。マシュー・フィリップ・マッケルウェイ「新出八曲一隻洛中洛外図屏風について」、『国華』一四〇五号、平成二十四年。
- 80 津田卓子「八曲一隻 洛中洛外図屏風について」、『名古屋博物館研究紀要』三十四巻、平成二十三年。
- 81 『清水寺史』第四巻・図録（法蔵館、平成二十三年）、大阪市美本図版解説。前掲註77馬淵「同論文」参照。
- 82 下坂守「高台寺の創建と高台院―康徳寺から高台寺へ―」、『展覧会図録「秀吉とねねの寺 高台寺の名宝」（鷺峯寺高台寺・朝日新聞社、平成七年）所収。



貼札墨書		
右 隻 (計40・欠3)		
第三扇 (7・欠1)	第二扇 (6・欠2)	第一扇 (3)
【欠失】(長楽寺?) 八坂(八坂塔) こうとくし(康德寺) 高台寺 きをんちゃ屋(祇園社) 六はら(六波羅蜜寺) けんになし(建仁寺) みゑいたう(御影堂) 新善光寺 □□橋(五条橋)	【欠失】(清水寺) 【欠失】(音羽滝) きよみつろくはう(清水六坊) めいほうるん(妙法院) 大佛(方広寺) 大仏かねつきたう(方広寺鐘楼) 大仏町 おけもちや(桶餅屋?)	神明の宮(????) □うふくし(東福寺) 三十三間(三十三間堂)



貼札墨書		
左 隻 (25・欠4)		
第三扇 (2・欠1)	第二扇 (5)	第一扇 (6・欠1)
さが(嵯峨) 清涼寺 【欠失】(大秦) 二条御城(二条城)	あたこ(愛宕山) をむろ(御室) 仁和寺 ミやうせんし(妙心寺) きやうどう(北野経堂) 下たちうり(下立売通)	たかを(神護寺) きんかくし(金閣寺) いしふどう(石不動) いま宮たひ所(今宮社?) き□□(北野) 【欠失】(大徳寺) 中たちうり(中立売通)

貼札墨書		
右 隻 (計40・欠3)		
第六扇 (7)	第五扇 (6)	第四扇 (11)
よしした(吉田社) 加茂(上賀茂社) かも川 りやうはんし(立本寺) しんにようたう(真如堂) 禁中(内裏) □け町(公家町?)	なんせん□(南禅寺) ようくわんたう(永観堂) くらたに(金戒光明寺) 三条橋 せいくわんし(誓願寺) 三条小橋(大和橋)	ちをんあん(知恩院) □わ□く□(栗田口) ぎをん小橋 四条橋 四条かは□町(四条河原町? 樵木町) てい□ん(ていあん 大雲院) きをんおたび(祇園旅所) 四条だうちやう(四条道場 金蓮寺) □志□殿(冠者殿) 四条通 四条むろ町通



【図1】「洛中洛外図屏風」 大阪市美本・右隻

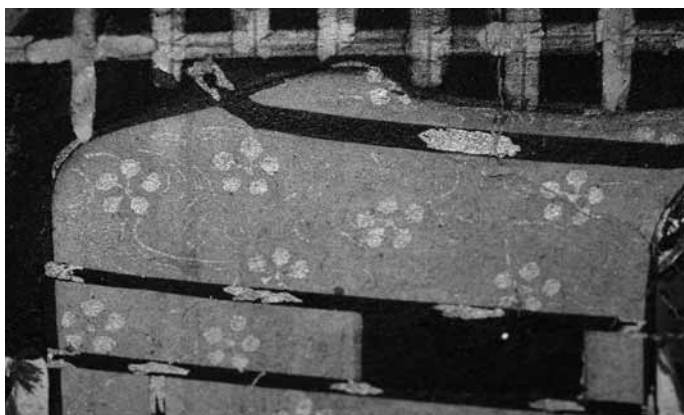
貼札墨書		
左 隻 (25・欠4)		
第六扇 (5)	第五扇 (3)	第四扇 (4・欠2)
大坂市立美術館蔵「洛中洛外図屏風」(田万家旧蔵本) 紙本金地着色 六曲一双 各一五・二・二×三三・三・二一(cm) 貼札総数六五(欠失七)	まつのを(松尾社) とうし(東寺) ほんこくし(本圀寺) たからてら(宝積寺) やはた(石清水八幡) よと(淀) とうしかいとう(東寺街道) □条もんせき(六条門跡 西本願寺)	となせのたき(戸名瀬滝) こくそう(虎兎堂 法輪寺) 【欠失】(天龍寺) 大井川 【欠失】(梅津?) しせんねむ(神泉苑)



【図1】「洛中洛外図屏風」 大阪市美本・左隻



【図5】夷森 林家本・左隻



【図2】参内行列の牛車 大阪市美本・左隻



【図6】金閣 大阪市美本・左隻



【図3】月鉾の祇園囃子 大阪市美本・右隻



【図7】神泉苑・多宝塔 大阪市美本・左隻



【図4】農民の昼餉 大阪市美本・左隻



【図10】 四条河原の遊女歌舞伎 大阪市美本・右隻



【図 8】 上賀茂社の競馬 大阪市美本・右隻



【図12】 方広寺鐘楼と秀吉墳墓（五輪塔）
大阪市美本・右隻



【図 9】 下鴨社 林家本・右隻



【図11】 四条河原の佐渡嶋座 神戸市博本・右隻
（「洛中洛外図屏風」神戸市立博物館蔵）



【図14】カブキモノと若衆 大阪市美本・右隻



【図13】武家 大阪市美本・左隻



【図17】鴨川べりの土坡 大阪市美本・右隻



【図15】武家女性 大阪市美本・左隻



【図18】函谷峠のお供町衆と胴懸 林家本・右隻



【図16】町衆女性 大阪市美本・右隻